

児童期の家族関係と両親イメージが 現在の自尊感情に与える影響

溝 上 菜 摘

〔抄 録〕

本研究の目的は児童期の家族関係と父親イメージ、母親イメージが現在の自尊感情に影響を及ぼすのかを検証することであった。予備調査として大学生に父親、母親をイメージする修飾語を3つずつ挙げてもらった。得られた修飾語の中から22対を選定した。これらを父親イメージ尺度、母親イメージ尺度とし、家族機能測定尺度、自尊感情尺度を加えた質問紙を作成して大学生を対象に本調査を行った。

一要因分散分析の結果、自尊感情尺度と家族機能測定尺度、父親イメージ尺度、母親イメージ尺度には関連が見られなかったため、次に相関を求めることにした。しかし、尺度間では関連は見られなかった。この原因として、児童期の自尊感情の発達は家族関係だけではなく、学校生活などの家族外の環境による影響も大きいのではないかと考えられる。また、児童期だけではなく、年齢範囲を広げて見てみると違う結果が得られるのではないかと考えられる。

キーワード 自尊感情, 家族関係, 両親イメージ, 児童期

第1章 序 論

第1節 自尊感情

1. 自尊感情

我々は、「私は消極的だ」、「自分は勉強が得意だ」などと自己の行動や、性格、能力などの評価を自分自身で定めている。このように、自分で自分を評定することを「自己評価」と言う。また、自己評価の結果をどの程度受容するかに応じて自尊感情（自尊心）が規定される⁽¹⁾。

自尊感情は、荒木⁽²⁾によれば、自分自身を評価の対象と見る評価的態度で、自己についてのプラス（肯定）またはマイナス（否定）の感情に関係すると述べている。山本ほか⁽³⁾は、自尊感情は自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値に関する感覚および感情であるとしている。

また、山本⁽¹⁾は、自尊感情を自信の上位概念であり、自分自身を価値のある優れた存在とみる態度に伴う感情であるとしている。たとえば、自己のさまざまな諸面に関する自己評価の結果、「私は物事を人並みには、うまくやれる」と感じる人もいれば、「何かにつけて、自分は役に立たない人間だ」などと感じる人もいる。自己評価が高ければ自尊感情の上昇に、自己評価が低ければ自尊感情の低下に結びつくが、自尊感情は自己評価に比べ、ある程度永続的で変化しにくいのである。

また、梶田⁽⁴⁾によれば、「自尊感情とは、自分自身を価値あるものとする感覚であり、人はみな、この感覚を持って生きていると考えている。自分自身を価値あるものだと考えることができ、自らの重要性を実感できる場合にのみ、意欲的で積極的であることができるし、心理的な充実感を持つことができるのである。逆に、自尊感情を喪失しそうな場合は、うつ病的気分が高まり、心身ともに病んだ状態となる。さらに、自尊感情はそれを支える根をもっており、またその主要な根が何であるかは、それぞれの人によって異なっている。空想的または妄想的なものであることもある。空想的に思い込んだりすることによって自尊感情を支えようとするのである。このような自尊感情は、現実的な基盤を持たないため傷つきやすく、内面では無理を重ねる必要もあって、そういう人の心理も不安定にならざるを得ないだろう」としている。

2. 自尊感情尺度

自尊感情を測る方法としては、自尊感情尺度が挙げられる。主な自尊感情尺度として、Rosenbergの尺度⁽⁵⁾、Coopersmithの尺度⁽⁶⁾、Janis & Field⁽⁷⁾の尺度がある。

Rosenbergは、自尊感情について、他者と比較することによって優越感や劣等感を感じるのではなく、自分自身で自己に対する尊重や価値を評定する程度であると考えている。そして、自尊感情には、自分について「非常によい (very good)」と考えることと、自分について「これでよい (good enough)」と考えることの2つの意味があるが、後者の「これでよい」と感じる程度が自尊感情の高さを示しているとした⁽³⁾。Rosenbergはこの考えを基に自尊感情尺度を作成した。この尺度は、自己受容、自己効力感、自己価値観（自尊感情に相当）などを総合的に評定して全体としての自尊感情を直接的に測定しようとする方法である⁽⁸⁾。本研究ではRosenberg⁽⁵⁾が作成した尺度を山本⁽⁹⁾が翻訳したものをを用いて調査を行う。

第2節 学童期（児童期）と家族関係

1. 学童期（児童期）と家族関係

岡堂⁽¹⁰⁾によれば、「学童期には認知力の変化、身体的成長、情緒面の発達、社会的対人関係の発達など、様々な変化が見られる時期であるという。例えば、学童期の情緒の発達の基礎は、家族の人間関係にある。家族の関係が穏やかであたかであれば、子どもは情緒的に安定する。反対に、家庭の中に絶えず争いがあり、家族関係がしっくりしなければ、子どもの情緒は不安

定になる。情緒発達は、対人関係の中で獲得されていくものであり、また環境の変化によっても変動しやすいものである。基本的には家族が構造的に安定していること、開放的なコミュニケーションがおこなわれること、家族の受容能力が高いこと、これらが情緒発達に必要な条件である」という。

また、子どもの成長を中心にしながら、家族全体が成長し発展していく。家族それぞれが外へ自立して歩みだし、内部では家族への忠誠心をもつようになるという¹⁰⁾。またこの二つのバランスがほどよく調和された状態を維持することが、家族の成長につながっていくという。

また、前島・小口¹¹⁾は、家族は子どもが発達するときに重要な基盤となっているものであり、その基盤である家族関係が不安定なものである場合、子どもが社会に対して不適応になってしまう可能性が高いことは否めないとしている。そこから、父母関係によって引き起こされた不安定な状態が、子どもの社会不適応になる一つの要因になっているのではないかと考え、小学5、6年生を対象に、父母関係、父子関係、母子関係、攻撃性、自尊感情、情緒安定性を絡めて検討を試みている。その結果、父子の不和は父母の不和、母子の不和、自尊感情の低さ、情緒不安定と関連があるという。また、母子の不和は父母の不和、父子の不和、攻撃性の高さに関連があり、父母関係は、父子関係、自尊感情に影響を及ぼしていたという。

このように、児童期は家族と子どもの双方が成長していく大事な時期であり、また特に子どもの精神面に与える影響は大きいと考えられる。そこで筆者は、主に様々な変化が見られる児童期の家族関係が現在の自尊感情に影響を与えているのではないかと考えた。

2. 家族機能測定尺度

家族関係を測る尺度として、家族機能測定尺度が挙げられる。これは、現実と理想の家族機能を測定する尺度で、草田・岡堂¹²⁾が、Olsonほか¹³⁾のFACESⅢを翻訳したものである¹⁴⁾。

草田¹⁴⁾によると、家族関係とは家族1人1人の感情が複雑に絡み合うものであり、またきわめてプライベートで、家族以外の人々には明かしくいようなさまざまな事情やいきさつを含んでいるという。そのため、家族関係を家族以外の者が外部から客観的にとらえることは難しいのである。

そこで、家族関係を測定する道具として、開発されたのがOlsonの円環モデル¹⁵⁾である。家族の機能について、凝集性・適応性・コミュニケーションの三次元を中心にとらえ、夫婦および家族システムをタイプ別に分類し、その機能に応じて家族が変化・移行することを考慮に入れた動的な理論モデルである。凝集性は「家族成員がお互いに対してもっている情緒的きずな」と定義され、家族の心理的距離を表す。測定・診断するための概念として「情緒的きずな・境界・連合・時間・空間・友人・意思決定・興味と娯楽」があげられ、その程度によって4段階に分類できる。凝集性が高すぎると「膠着 (enmeshed)」、低すぎると「遊離 (disengaged)」と評価され、非機能的で問題状況を呈しやすい。中程度の「分離 (separated)」

と「結合 (connected)」は機能的であり、自立と結合のバランスがとれている。適応性は、「夫婦および家族システムが状況的・発達の危機（ストレス）に対して、その力構造、役割関係、ルールを変化させるための能力」と定義される。測定・診断するための概念として「リーダーシップ・コントロール・しつけ・話し合いのスタイル・役割関係・関係のあり方」があげられ、その程度によって4段階に分類できる。適応性が高すぎると「無秩序 (chaotic)」、低すぎると「硬直 (rigid)」と評価され、変化がありすぎても少なすぎても問題がある。中程度の「構造化 (structured)」と「柔軟 (flexible)」は機能的で、家族ライフサイクルに応じての適応がよい。コミュニケーションは、モデル上には表されないが、凝集性と適応性の二次元を促進させる働きをもつ次元である。円環モデルでは凝集性、適応性は独立した2軸の直交座標として表され、それぞれ4段階を組み合わせることで16家族タイプに分類できる。また、両次元における機能の程度の違いから、「バランス群」、「中間群」、「極端群」の3家族群としても分類できる¹⁶⁾。本研究ではOlson¹³⁾が作成した家族機能測定尺度を草野・岡堂¹⁴⁾が翻訳したものをを用いて調査を行う。

3. SD法

Anderson, E. によると子どもの自尊感情を育てるには、さまざまな場面において親の対応の仕方がとても重要であるという。このことから、父親、母親がどのような人だったかを記述形式で回答する調査も考えたが、結果を得点化した方が分かりやすいと考え、SD法での調査を行うことにした。

SD法 (semantic differential method) とは、心理臨床大事典¹⁷⁾によると「1950年代にアメリカの心理学者Osgood, C. E.らによって、意味の研究手法、すなわち特定の記号や概念が意味し指示する内容を、客観的・多次的・定量的に測定する方法として開発されたものである。具体的には、「明るい-暗い」、「良い-悪い」などの正反対の意味をもついくつかの形容詞対からなる尺度上に測定対象を評定させ、その評定上の分析によって測定対象間の意味差を判別する方法である。」という。

また、Osgood¹⁸⁾によると、「共感覚と社会的な固定観念の意味の測定において、初期の研究では(1)記述または判断の過程は、一組の言葉で定義された実験的な連続という概念の分配としてみなされる。(2)多くの異なる実験的な連続または、変化を意味する方法は本質的に同等であり、またそれゆえに次元によって表現される。(3)限られた連続体は意味に関する空間と定義されている。それはどんな概念の意味でも明細に述べられる。ということが想定されたという。なお、特定の題目の概念の測定を得る際に用いた手順は、一組の極性の言葉 (e.g.粗い-滑らかな) と概念 (e.g.女性) を呈示することである。題目と図式尺度上の被体験者のチェックが極端であることや、チェックの反応速度による激しさは、被検者の連想の方向を示すにすぎないという。一連の尺度の標準化した上で、被検者の判断の分布は他とは違う概念の意味が出

る結果となった。このことから、この測定は‘semantic differential (意味に関する差異)’と呼ばれるようになった」という。本研究では、父親と母親のイメージについてSD法を用いて調査を行う。

4. 自尊感情と父子関係

自尊感情の形成には、乳児期の頃から触れ合う機会が多いであろう母子関係がより大きく影響することが考えられるが、先に挙げた前島・小口⁽¹⁾の研究結果で、父子関係が自尊感情と関連していたとの結果が出ているため、本研究でも父親との関係についても扱うことにした。

以上のことから、本研究では家族機能尺度とSD法を用いて、家族関係、父親・母親に対するイメージを把握し、その結果が自尊感情の形成に影響を及ぼしているかどうかを明らかにすることを目的とする。

第2章 方 法

第1節 予備調査

1. 調査対象

関西の私立大学に通う大学生52名（男性21名、女性31名）に調査を行った。平均年齢は20.8歳であった。

2. 調査時期

2008年7月に質問紙調査を行った。

3. 父親・母親という言葉からイメージする修飾語（形容詞）の抽出

50名の大学生に、今もっている父親イメージ・母親イメージを修飾語（形容詞）でそれぞれ3つずつ挙げてもらった。その結果、父親をイメージする修飾語72語、母親をイメージする修飾語67語が得られた。それらの中から、本調査で使う修飾語を選定した。選定の基準としては、

- (1) 出現頻度が高いものを選ぶ。
- (2) 父親イメージ・母親イメージのどちらにも出現すること。
- (3) 多義的な形容詞は避ける。
- (4) わかりやすい感覚的・直感的な修飾語を選択する。
- (5) 価値に関する語に偏らないようにする。

など、足立⁽⁹⁾や大山ら⁽²⁰⁾のものを参考にした。また、反意語の選定には、過去に行われた研究や、SD法においてよく用いられる形容詞対を参考にした。

4. 父親イメージ尺度・母親イメージ尺度の完成

上記の調査の結果、計22対の修飾語対を父親イメージ尺度・母親イメージの尺度として採用した。

第2節 本調査

1. 調査対象

関西の私立大学に通う大学生152名に調査を行った。欠損値のあった調査紙を取り除いた最終有効回答者数は148名（男性53名、女性95名）、平均年齢は20.4歳であった。

2. 調査時期

2008年10月に質問紙調査を行った。

3. 質問紙の内容

Olsonほか⁽³⁾のFACESⅢを、草田・岡堂⁽⁴⁾が翻訳した「家族機能測定尺度」と、筆者が予備調査を行い作成した「父親イメージ尺度・母親イメージ尺度」と、Rosenberg⁽⁵⁾が作成したものを山本ら⁽⁹⁾が翻訳した「自尊感情尺度」を使用した。これに、年齢、性別を尋ねるフェイスシートを加えた。家族機能測定尺度は、家族関係についての20の項目に「いつもある・よくある・ときどきある・たまにある・まったくない」の5段階評定（5点～1点）で回答を求めた。教示は「あなたの幼い頃の家族の様子についておたずねします。次の各項目について、小学生のころの家族の様子を思い出して、最もよくあてはまると思うところに○をつけてください。」とした。また、小学生の頃の家族の様子を尋ねたかったので、項目と選択肢をすべて過去形に書き直した。その下には、何歳頃の家族の様子かを記述する箇所も設けた。父親イメージ尺度・母親イメージ尺度は、父親・母親をイメージする22の修飾語対に「非常にあてはまる・かなりあてはまる・ややあてはまる・どちらともいえない・ややあてはまる・かなりあてはまる・非常にあてはまる」の7段階評定（7点～1点）で回答を求めた。自尊感情尺度は、自己についての10項目に「あてはまる・ややあてはまる・どちらともいえない・ややあてはまらない・あてはまらない」の5段階評定（5点～1点）で回答を求めた。教示は「あなたが今持っている「父親（母親）」イメージについておたずねします。以下の形容詞対のものさしを用いて、どちらの形容詞にどの程度当てはまるかを○で囲んでチェックしてください。」とした。

第3章 結 果

第1節 各尺度の因子構造

1. 家族機能測定尺度の因子構造

家族機能測定尺度の得点をもとに最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。因子負荷量が両因子にわたって.35より大きい1項目を除いた結果、2因子が抽出された。結果をTable 1.に示す。

Table1. 家族機能測定尺度の因子分析（最尤法、プロマックス回転）

項目	第1因子	第2因子	共通性
第1因子 凝集性			
10.私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしていた。	.763	-.090	.499
7.私の家族では、みんなを引っ張っていく者(リーダー)が決まっていた。*	.737	-.257	.357
9.私の家族は、お互いに密着していた。	.716	-.034	.482
6.家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じていた。	.634	-.094	.332
2.家族がまとまっていることは、とても大切だった。	.540	.263	.551
20.私の家族は、みんなで何かをするのが好きだった。	.538	.258	.541
1.私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求めた。	.517	.058	.311
11.家族で何かをする時は、みんなでやった。	.515	.266	.519
8.私の家族では、誰がどの家事・用事をするか決まっていた。*	.429	-.188	.112
17.私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談した。	.424	.280	.416
19.家族は、それぞれの友人を気に入っていた。	.371	.231	.305
第2因子 適応性			
12.私の家族は、子どもの言い分も聞いてしつけをしていた。	-.069	.795	.564
3.私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えていた。	.037	.728	.567
4.私の家族は、叱り方について親と子で話し合った。	-.254	.649	.267
18.私の家族では、問題の解決には子どもの意見も聞いていた。	-.030	.600	.337
15.家族の決まりは、必要に応じて変わった。	-.018	.518	.256
14.私の家族では、子どもが自主的に物事を決めていた。	-.102	.487	.181
16.家族を引っ張って行くもの(リーダー)は、状況に応じて変わった。	-.042	.466	.193
5.私の家族では、家事・用事は、必要に応じて交代した。	.041	.444	.223
固有値	5.825	1.190	

*は反転項目

第1因子は、「2. 家族がまとまっていることは、とても大切だった」、「9. 私の家族は、お互い密着していた」、「11. 家族で何かをする時は、みんなでやった」など、家族全員で協力し合ったり、家族でのまとまりを重要視する内容の11項目で構成されている。先行研究とほぼ同様の項目が確認されたので、Olsonほか⁽¹³⁾に倣い「凝集性因子」と命名した。

第2因子は、「3. 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えていた」、「15. 家族の決まりは、必要に応じて変わった」など、何か問題などが起こったとき、そのつど家族の役割を変えて適応させている内容の8項目で構成されている。先行研究とほぼ同様の項目が確認されたので、Olsonほか⁽¹³⁾に倣い「適応性因子」と命名した。

2. 父親イメージ尺度・母親イメージ尺度の因子構造

父親イメージ（以下F尺度）の得点をもとに最尤法（プロマックス回転）による因子分析を

行った。因子負荷量が両因子にわたって.35より大きい項目や、両因子共に著しく小さい項目

Table2. 父親イメージ尺度の因子分析（最尤法、プロマックス回転）

項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
心理的距離感因子				
18.さみしい-にぎやかな	-.867	-.051	.149	.652
1.明るい-暗い	.843	.068	-.015	.663
11.近い-遠い	.558	-.013	.232	.459
13.悲しい-嬉しい	-.550	.178	-.144	.479
父親の弱さ因子				
9.小さい-大きい	.137	.764	-.246	.523
16.弱い-強い	-.188	.742	.150	.717
4.頼もしい-頼りない	.153	-.618	.036	.478
7.男性的な-女性的な	.037	-.563	-.191	.387
8.不真面目な-真面目な	.222	.393	.071	.159
穏やかさ因子				
12.激しい-穏やか	.202	.090	-.754	.486
22.柔軟な-頑固な	.056	.030	.684	.502
3.やわらかい-かたい	.076	.033	.648	.463
19.丸い-四角い	.221	.111	.561	.455
固有値	3.222	2.293	.909	

を除いた結果、F尺度では3因子が抽出された。結果をTable2. に示す。

F尺度の第1因子は、「18. さみしい-にぎやかな」、「1. 明るい-暗い」、「11. 近い-遠い」など、父親に対してにぎやかだと感じたり、また明るく近い存在と感じていることから、父親との心理的な距離を表していると考えられる。そのためこの4項目の因子は「心理的距離感因子」と命名した。

Table3. 母親イメージ尺度の因子分析（最尤法、プロマックス回転）

項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
明朗因子				
1.明るい-暗い	.868	-.160	-.104	.546
18.さみしい-にぎやかな	-.738	.121	.159	.367
10.おもしろい-つまらない	.717	.065	-.053	.528
20.楽しい-苦しい	.697	.189	-.014	.654
15.あたたかい-つめたい	.632	.141	.182	.697
11.近い-遠い	.423	.105	.216	.404
17.好きな-嫌いな	.352	.188	.337	.521
穏やかさ因子				
12.激しい-穏やか	.330	-.820	-.283	.609
22.柔軟な-頑固な	-.065	.791	-.166	.528
3.やわらかい-かたい	.153	.663	-.028	.559
5.厳しい-優しい	-.041	-.573	.144	.316
19.丸い-四角い	.186	.486	-.058	.343
6.広い-狭い	.113	.465	.304	.510
7.男性的な-女性的な	-.051	-.426	.283	.193
誠実性因子				
21.無責任な-責任感のある	-.007	.275	-.968	.845
8.不真面目な-真面目な	.200	.098	-.865	.569
4.頼もしい-頼りない	.319	-.203	.630	.612
9.小さい-大きい	.106	-.084	-.413	.152
2.不安定な-安定した	-.080	-.272	-.406	.378
固有値	5.896	2.321	1.112	

F尺度の第2因子は、「9. 小さい-大きい」、「16. 弱い-強い」、「4. 頼もしい-頼りない」など、父親という人物の弱さや人としての小ささを表している5項目で構成されている。したがってこの因子は「父親の弱さ因子」と命名した。

F尺度の第3因子は、「22. 柔軟な-頑固な」、「3. やわらかい-かたい」、「19. 丸い-四角い」など、父親の穏やかなさまや、性格的なやわらかさを表す4項目で構成されている。よってこの因子は「穏やかさ因子」と命名した。

次に、母親イメージ尺度（以下M尺度）の得点をもとに最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。因子負荷量が両因子にわたって.35より大きい項目や、両因子共に著しく小さい項目を除いた結果、M尺度では3因子が抽出された。結果をTable3. に示す。

M尺度の第1因子は、「1. 明るい-暗い」、「20. 楽しい-苦しい」、「10. おもしろい-つまらない」など、母親の性格や雰囲気 of 明るさを表す7項目で構成されている。そのためこの因子は「明朗因子」と命名した。

M尺度の第2因子は、「22. 柔軟な-頑固な」、「3. やわらかい-かたい」、「19. 丸い-四角い」など、母親の性格的なやわらかさや、穏やかさを表す7項目で構成されている。よってこの因子は「穏やかさ因子」と命名した。

M尺度の第3因子は、「21. 無責任な-責任感のある」、「8. 不真面目な-真面目な」、「2. 不安定な-安定した」など、母親の誠実さを表す5項目で構成されている。よってこの因子は、「誠実性因子」と命名した。

3. 自尊感情尺度の因子構造

自尊感情尺度の得点をもとに最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。因子負荷量が著しく小さい1項目を除いた結果、1因子が抽出された。この因子はそのまま「自尊感情因子」と命名した。結果をTable4. に示す。

Table4. 自尊感情尺度の因子分析（最尤法、プロマックス回転）

自尊感情因子	因子	共通性
6. 自分に対して肯定的である。	.716	.513
7. だいたいにおいて、自分に満足している。	.708	.502
10. 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う。	-.682	.466
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。	.648	.420
5. 自分には、自慢できるところがあまりない。	-.637	.406
2. 色々な良い素質を持っている。	.576	.331
9. 自分は全くだめな人間だと思うことがある。	-.559	.313
3. 敗北者だと思うことがよくある。	-.538	.290
4. 物事を人並みには、うまくやれる。	.484	.234
固有値	3.473	

次に本尺度の信頼性の検討を行った。Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .95$ であった。この結果から自尊感情尺度は内部一貫性の高い項目で構成されていることが分かる。

第2節 家族関係・父親と母親に対するイメージが自尊感情に及ぼす影響

1. 家族機能測定尺度の群分け

まず、家族機能測定尺度の20項目から因子分析によって抽出された2因子19項目を凝集性11項目、適応性8項目に分けた後、それぞれの尺度得点を算出した。次に、凝集性、適応性の各次元を低いレベルから高いレベルまで4段階に分けるために、度数分布を用いて各尺度の得点範囲を調べた。結果をTable5.に示す。

Table5. 凝集性尺度・適応性尺度の得点分布

	凝集性	適応性
最小値	18	9
最大値	48	34
25パーセント下位	28	16
中間	34	19
25パーセント上位	38	23
得点範囲	18～48	9～34

凝集性尺度の得点分布（得点範囲：18～48点）は、下位25パーセントが28、中間が34、上位25パーセントが38、最小値が18、最大値が48であった。

適応性尺度の得点分布（得点範囲：9～34点）は、下位25パーセントが16、中間が19、上位25パーセントが23、最小値が9、最大値が34であった。

得られた値をもとに、家族の機能度の段階を4×4の16のタイプに分類した。その後、16タイプに分けたものを、Olsonほか（15）の円環モデルをもとに極端群、中間群、バランス群の三群に分けた。この三群分けの図をFig.1に示す。縦軸は適応性を示し、横軸は凝集性を示している。極端群は（1）凝集性の18以上28未満、且つ適応性の9以上16未満、（2）凝集性の38以上48以下、且つ適応性の9以上16未満、（3）凝集性の18以上28未満、且つ適応性の23以上34以下、（4）凝集性の38以上48以下、且つ適応性の23以上34以下の範囲の4つであり、図では黒塗りの部分である。中間群は（1）凝集性の28以上34未満、且つ適応性の9以上16未満、（2）凝集性の34以上38未満、且つ適応性の16以上19未満、（3）凝集性の18以上28未満、且つ適応性の16以上19未満、（4）凝集性の38以上48以下、且つ適応性の16以上19未満、（5）凝集性の18以上28未満、且つ適応性の19以上23未満、（6）凝集性の38以上48以下、且つ適応性の19以上23未満、（7）凝集性の28以上34未満、且つ適応性の23以上34以下、（8）凝集性の34以上38未満、且つ適応性の23以上34以下の範囲の8つであり、図では白い部分である。バランス群は（1）凝集性の28以上34未満、且つ適応性の16以上19未満、（2）凝集性の34以上38未満、且つ適応性の16以上19未満、（3）凝集性の28以上34未満、且つ適応性の19以上23未満、（4）凝集性の34以上38未満、且つ適応性の19以上23未満の範囲の4つであり、図では格子模様の部分である。

また、三群の人数分布を調べたところ、極端群40人、中間群63人、バランス群38人という結果になった。結果をTable6.に示す。

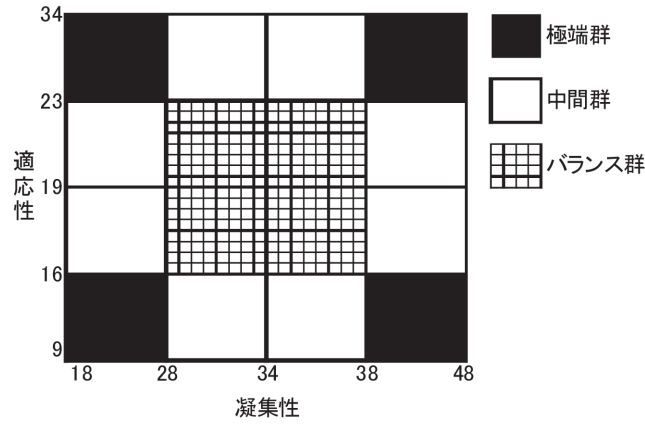


Fig.1. 家族機能測定尺度の群分け図

Table6. 各群の人数

群	度数(人)
極端群	40
中間群	63
バランス群	38
合計	141

2. 各尺度と三群との分散分析

自尊感情尺度・F尺度・M尺度と家族機能測定尺度で得られた三群を用いて、一要因分散分析を行った。結果をTable7.に示す。

Table7. 分散分析、多重比較の結果

因子名		1.極端群	2.中間群	3.バランス群	F値	多重比較
自尊感情因子	平均	0.01	-0.02	0.87	0.08	
	標準偏差	1.02	0.92	0.87		
(父)心理的距離感因子	平均	-0.01	0.02	-0.07	0.11	
	標準偏差	1.16	0.89	0.75		
(父)父親の弱さ因子	平均	0.41	-0.85	0.08	0.45	
	標準偏差	0.98	0.96	0.78		
(父)穏やかさ因子	平均	0.24	-0.47	-0.22	2.64	
	標準偏差	0.86	0.9	0.91		
(母)明朗因子	平均	-0.08	0.13	-0.13	1.14	
	標準偏差	1.01	0.86	0.8		
(母)穏やかさ因子	平均	-0.15	0.1	-0.02	0.91	
	標準偏差	0.87	0.97	0.82		
(母)誠実性因子	平均	-0.07	0.21	-0.26	3.21**	1<2, 2>3
	標準偏差	1.1	0.87	0.8		

** $p < .05$

分散分析の結果、「自尊感情尺度」における群には有意な差は見られなかった ($F(2,135) = 0.08, n.s.$)。また、「F尺度」の第1因子 ($F(2,137) = 0.11, n.s.$)、第2因子 ($F(2,137) = 0.45, n.s.$)、第3因子 ($F(2,137) = 2.64, n.s.$)、「M尺度」の第1因子 ($F(2,137) = 1.14, n.s.$)、第2因子 ($F(2,137) = 0.91, n.s.$) にも有意な差は見られなかった。一方、「M尺度」の第3因子には有意な差が見られた ($F(2,137) = 3.21, p < .05$)。多重比較を行ったところ、M尺度の

「誠実性因子」において中間群とバランス群との間に有意な効果が見られた ($p < .05$)。このことから中間群が他の2群より平均値が大きいことが分かった。

第3節 各尺度得点の相関

1. 自尊感情尺度と家族機能測定尺度

一要因分散分析で、有意な効果が見られたのは、M尺度の「誠実性因子」のみであった。しかし自尊感情との関連は見られなかったため、家族関係・父親と母親に対するイメージと自尊感情との相関を求めることにした。自尊感情尺度と家族機能測定尺度の相関をTable8.に示した。「自尊感情因子」と家族機能測定尺度の各因子には相関が見られなかったが、「凝集性因子」は「適応性因子」との間に正の相関が見られた。これらのことから、自尊感情と家族メンバーがもつ情緒的なつながりや、家族の役割関係などの変化には相関関係は見られないことが分かった。

Table8. 自尊感情因子と家族機能測定尺度（各因子間）の相関

	1.	2.	3.
1.自尊感情因子	1.000		
2.凝集性因子	.102	1.000	
3.適応性因子	.106	.745**	1.000

** $p < .01$,

2. 自尊感情尺度と父親イメージ尺度

自尊感情尺度と父親イメージ尺度の相関をTable9.に示した。「自尊感情因子」と父親イメージ尺度の各因子には相関が見られなかったが、「心理的距離感因子」と「父親の弱さ因子」には負の相関が見られた。また「心理的距離感因子」と「穏やかさ因子」には正の相関が見られた。このことから、自尊感情と対象者の抱いている父親との心理的な距離感や、父親の人としての器の小ささや、性格的な穏やかさ、やわらかさというイメージに相関関係は見られないことが分かった。

Table9. 自尊感情因子と父親イメージ尺度（各因子間）の相関

	1.	2.	3.	4.
1.自尊感情因子	1.000			
2.心理的距離感因子	-.100	1.000		
3.父親の弱さ因子	.001	-.436**	1.000	
4.穏やかさ因子	-.036	.395**	.117	1.000

** $p < .01$,

3. 自尊感情尺度と母親イメージ尺度

自尊感情尺度と母親イメージ尺度の相関をTable10.に示した。「自尊感情因子」と「明朗因子」の間に負の相関が見られた。しかし-.204という低い値であったため相関はほぼ見られないことが分かった。また、「自尊感情因子」と「穏やかさ因子」、「誠実性因子」の間にも相関は見られなかった。「明朗因子」と「穏やかさ因子」、「誠実性因子」、「穏やかさ因子」と「誠

実性因子」の間には正の相関が見られた。このことから、自尊感情と対象者の抱いている母親の明るい面や面白い面、また母親との心理的距離、母親の性格的な穏やかさや誠実な面というイメージに相関関係は見られないことが分かった。

Table10. 自尊感情因子と母親イメージ尺度（各因子間）の相関

	1.	2.	3.	4.
1.自尊感情因子	1.000			
2.明朗因子	-.204*	1.000		
3.穏やかさ因子	-.131	.613**	1.000	
4.誠実性因子	-.147	.617**	.346**	1.000

* $p < .05$, ** $p < .01$,

第4章 考 察

本研究は、児童期の家族関係および両親イメージが、現在の自尊感情に影響を及ぼしているかどうかを検証するためのものであった。

1. 父親イメージ尺度・母親イメージ尺度の因子構造

父親イメージ・母親イメージ（以下F尺度・M尺度）の得点をもとに最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った結果、F尺度・M尺度ともに3因子抽出された。F尺度は心理的距離感因子、父親の弱さ因子、穏やかさ因子の3因子であり、M尺度は明朗因子、穏やかさ因子、誠実性因子の3因子である。両尺度の第1因子はお互い「明るい」、「にぎやかな」、「近い」など肯定的なイメージや心理的な距離を表す修飾語で構成されていたが、M尺度の方が肯定的なイメージの修飾語が多く、上記のほかに「あたたかい」、「楽しい」という修飾語も含まれていた。このことから、子どもから見て、父親と母親では母親に対する方が心理的距離が近いのではないかと考えられる。また、F尺度の第3因子、M尺度の第2因子は共通して「穏やかさ因子」であったが、こちらもM尺度では「穏やか」、「やわらかい」の他に「優しい」、「広い」、「女性的な」という修飾語も含まれており、父親より母親は、より全体的に優しく包み込むようなイメージがあるのではないかと考えられる。また、M尺度の第3因子は「誠実性因子」という誠実なイメージの修飾語で構成されており、3因子間において全体的に肯定的なイメージの尺度となった。F尺度の第2因子は「父親の弱さ因子」という、内面的な小ささや頼りがいがないといった否定的なイメージの修飾語で構成されており、3因子間において肯定的、否定的の両方のイメージが共存する尺度となった。結果として、母親の全体的な肯定イメージは、母親の心や生活の余裕などから表れる態度を、子どもが肯定的に感じとるためではないか。父親には肯定的イメージもあったが否定的なイメージも含まれていたのは、仕事などのストレスにより出てきた態度を、子どもが否定的に感じとるためではないか。そのような点から、一般的傾向として子どもは父親より母親との心理的距離が近いと感じているのではないかと考え

られる。

2. 家族関係、両親イメージと自尊感情の関連、および各尺度内の関連

一要因分散分析の結果では、自尊感情尺度と家族機能測定尺度、父親イメージ尺度、母親イメージ尺度（以下F尺度、M尺度）との関連が見られなかった。そこで、自尊感情尺度と家族機能測定尺度、F尺度、M尺度における各因子間との相関を求めたところ、自尊感情因子と相関があったのはM尺度の明朗因子のみであった。しかし-.204という低い値であったので、母親の明るさや母親に対する好感と自尊感情には関連がないのではないかと考えられる。その他で相関が見られたのは、まず家族機能測定尺度では、凝集性因子と適応性因子に正の相関が見られた。このことから家族の情緒的な繋がりと家族の役割には関連があるのではないかと考えられる。情緒的な繋がりがあると、家族のチームワークがより発揮されることがあるのかもしれない。また、父親イメージでは、心理的距離感因子と父親の弱さ因子に負の相関が見られた。このことから父親に対する心理的な距離と父親の弱さには関連があるのではないかと考えられる。父親との心理的距離が近いと、父親に対するイメージも頼りがいがあるなど、肯定的なものになるのかもしれない。また、心理的距離感因子と穏やかさ因子に正の相関が見られた。このことから父親との心理的な距離と父親の穏やかさには関連があるのではないかと考えられる。母親イメージでは穏やかさ因子と明朗因子、誠実性因子に相関が見られた。このことから、母親の穏やかさと明るさや誠実性には関連があるのではないかと考えられる。穏やかであれば、気持ちに余裕があり明るく振舞えたりするのかもしれないし、また不真面目なことや不安定な状態になりにくいのかもしれない。

3. 現在の自尊感情の高低が家族関係、両親イメージに与える可能性

今回は過去の家族関係が現在の自尊感情にどう影響をおよぼすかについて検討したが、逆に現在の自尊感情の高低によって過去の家族関係や両親イメージにどう影響を与えているかといった視点での考察も可能である。先にも挙げた前島・小口⁽¹¹⁾の研究のように、父子の不和、父母の不和が自尊感情の低下に影響を与えるのなら、自尊感情が高ければ両親に対するイメージは肯定的なものが多く、また家族の絆や役割分担も機能しているというイメージを抱くのではないかと考える。また、自尊感情が低ければ、両親に対するイメージは否定的なものが多く、家族の絆や役割分担はあまり機能していないというイメージを抱くのではないかと考えられる。

4. 総合的考察

一要因分散分析の結果、有意な効果が見られたのはM尺度の「誠実性因子」のみであったが、自尊感情との関連は見られなかった。また、自尊感情尺度と家族機能測定尺度、F尺度、M尺

度の各因子間と自尊感情因子に相関は見られなかった。この要因として、まず、自尊感情の形成要因は家庭内だけではないということが考えられる。岡堂⁽¹⁰⁾によれば、「児童期は認知力、身体的発達、情緒的発達、対人関係の発達といった様々な面が発達する時期である。また、あらゆる発達の面に関わってくるのが、特に対人関係の発達であるという。子どもが学校という集団に入って友人関係を結んでいくとき、新しい雰囲気ストレスを感じる。しかし、家が近い、席が近いといった偶然的な出会いに左右され、友達を選び始めるようになる。友達といることが最大の楽しみとなると、親や教師よりも友達の影響が強くなるという。また、小学4年から6年ごろにかけて、仲間が段々グループ化していく。グループの結束は強く、メンバー内での役割が生まれ、約束ごとまで取り交わされる。このような中で、子どもはお互いの個性を認め合い、集団を守るために規則に従うことの大切さを学んでいく」のだという。このような成長は、家庭内だけでは経験できないことであると考えられる。また、自尊感情は児童期にとどまらず青年期の前半における中学、高校という環境が変わる中で発達していくことも考えられる。また、被験者は大学生であったが、家族機能測定尺度については小学生の頃の家族関係についてを問うていたので、記憶が曖昧であったり、現実的な回答ではなかったものもあったのかもしれない。そのような要因から、本研究では相関が見られなかったのではないかと考えられる。

自尊感情に影響をおよぼすものとして家族関係を取り上げてみたが、有意な効果や相関が見られないという結果が出たことから、家族関係だけでなく家庭の外にあるコミュニティにも目を向けてみることで、児童期だけでなくそれ以降の年齢にも目を向けてみるのが今後の課題となるのではないかと考えられる。また、自尊感情の高低に着眼し、それが家族に対するイメージにどう影響をおよぼしているかを検討することも重要ではないかと思われる。

〔注〕

- (1) 山本真理子 (2005). 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉—。サイエンス社。
- (2) 荒木紀幸 (2007). 教育心理学の最先端—自尊感情の育成と学校生活の充実—。松籟社。
- (3) 堀洋道・山本真理子・松井豊 (1994). 心理尺度ファイル—人間と社会を測る—。垣内出版株式会社。
- (4) 梶田叡一 (1988). 自己意識の心理学。東京大学出版会。
- (5) Rosenberg, M. (1965). Society and the Adolescent Self-image. Princeton University Press, Princeton.
- (6) Coopersmith, S. (1967). The antecedents of self-esteem. San Francisco: W. H. Freeman.
- (7) Janis, I. L., & Field, P. B. (1959). Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), Personality and persuasibility. New Haven: Yale University Press. Pp. 55-68.
- (8) 櫻井茂男・松井豊・堀洋道 (2007). 心理測定尺度集 IV—子どもの発達を支える〈対人関係・適応〉—。サイエンス社。
- (9) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造。教育心理学研究,

30, 64-68.

- (10) 岡堂哲雄（1989）. 家族関係の発達と危機. 株式会社同明舎出版.
- (11) 前島芳名子・小口孝司（2001）. 父母の不和が子どもの自尊心、情緒安定性ならびに攻撃性に及ぼす影響—父は情緒に、母は行動に一. 家族心理学研究, 15, 45-56.
- (12) 草野寿子・岡堂哲雄（1993）. 家族関係査定法 岡堂哲雄（編）. 心理検査学. 垣内出版, 573-581.
- (13) Olson, D. H., McCabbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985). Family Inventories. StPaul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- (14) 草田寿子（1995）. 日本語版FACESⅢの信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 28 (2), 24-32.
- (15) Olson, D. H., Sprenkle, DH. and Russell, CS. (1979). Circumplex model of marital and family system: I Cohesion and Adaptability Dimensions, Family types, and clinical applications Family Process, 18.
- (16) 岡堂哲雄・国谷誠朗・長谷川浩・花沢成一・平木典子・亀口憲治・大熊保彦（1999）. 家族心理学事典. 金子書房
- (17) 氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（2003）. 心理臨床大事典. 培風館.
- (18) Osgood, C. E. (1953). Method and Theory in Experimental Psychology. Oxford University Press. Pp. 713-714.
- (19) 足立匡基（2005）. 青年男子の同一性地位と父親・母親イメージの関連性についての研究. 佛教大学卒業論文
- (20) 大山正・池田央・武藤真介（1971）. 心理測定・統計法. 有斐閣.

【参考文献】

- Anderson, E. (1999). 親から子への贈りもの—自尊感情を伸ばす5つの原則. 玉川大学出版部
- 井上正明・小林利宣（1985）. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対構成の概観. 教育心理学研究, 33, 253-260.

【付記】

本論文執筆にあたり、丁寧にご指導頂いた指導教員の先生、調査にご協力頂いた学生の皆様、お世話になったすべての方々に対して、深く御礼申し上げます。

（みぞかみ なつみ 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程）

（指導：牧 剛史 講師）

2009年9月30日受理